

感染症を読む



都甲幸治

もちろん僕も家にいる。COVID-19（新型コロナウイルス）のせいだ。そして空いた時間は、つい感染症に関する本を読んでしまう。ジャレド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄』（草思社文庫）は衝撃的だった。彼はこう問う。ニューギニアや南北アメリカ先住民は結局西洋に支配されることになった。それはなぜか。白人とそれ以外の人種的な優劣が原因でないとすれば、それ以外の理由は何だろうか。

彼が指摘するのが、環境的な要因である。ユーラシア大陸は東西に長い。しかも地理的な障壁も少ない。だから同じ緯度に暮らすたくさんの人々が様々なアイデアを出し合いながら、互いに高め合いやすい。しかもたまたま家畜化できる動物と、農業化できる植物に恵まれていた。こうして食料生産が進み、巨大な人口と軍勢力が蓄えられることになった。家畜と人間の混在により多様な感染症が人間に取り付き、人々はそれに対する免疫も身につけていった。

それに対して南北アメリカ大陸は東西が短い。そして西暦1500年以降、ユーラシアとその他の世界が直面したとき、圧倒的な軍勢力と感染症によって、ユーラシア側は勝利を収め続けたのだ。そしてその結果は、世界規模の格差として現在まで続いている。

白人優位の世界は白人が優れていたからではない、単にユーラシアに偶然住んでいたからというだけで、というダイヤモンドの説に僕は心底驚いた。もちろん、人種が捏造された概念でしかなく、人類には1つの種しかない、という科学的な事実は知ってはいた。けれども、捏造されたと指摘するだけでは人は解放されない。現に目の前に巨大な格差が存在するからだ。

かつてレヴィ＝ストロースは、西洋だけが進歩しているのではなく、世界中の全ての人々が環境に合わせ

た進化を遂げているのだと主張して西洋中心主義を批判した。しかしこうした相対主義では足りない。どうして西洋が世界を支配しているのかの説明がないからだ。そこにダイヤモンドはきちんと答えている。

ダイヤモンドの環境決定論を読んで、「それじゃあ一人一人がどれだけ努力しても意味がないのでは」と思った人もいるかもしれない。だが『危機と人類』（日本経済新聞出版社）で彼はそうした考え方に反論している。日本やチリなど世界の国々の危機対応について語りながら、現実を見据える力と、柔軟に自己を組み替えていく力も持った人々は人種や環境とは関係なく、生きのこる力を持つ、と彼は説く。

ここでも彼は、安易な人種主義を退けている。しかも環境決定論は宿命論とは違うと強調する。こうした、人はどこからでも状況をよくしていける、という信念に僕はたまらなくアメリカを感じる。ほとんど根拠なき自己信頼としてのアメリカだ。

最近、僕は『引き裂かれた世界の文学案内』（大修館書店）、『世界文学の21世紀』（Pヴァイン）、『「街小説」読み比べ』（立東舎）と3冊をほぼ同時に刊行した。日本や海外の文学、アート、映画などについて語りながら僕が繰り返し強調したのは、少数派からの視線を忘れるな、ということだ。

人種的な少数派や貧しい者たち、移民など、弱い立場の人々は多数派とは違う方法で世界を見ている。そして彼らに寄り添うことこそ芸術の役割だと僕は思う。だからこそ、差異を直視しながら現状に甘んじない、というダイヤモンドの精神は僕を鼓舞してくれた。僕らはどこからでも進んでいける。そして声を届けることができる。そのことを彼は持ち前の楽観を通して教えてくれる。（とこう こうじ・早稲田大学教授）